

もう一つの国引き神話

——東アジアの視点から——

石 破 洋
(国文教室)

A Study on Another *Kumibiki* Myth ——from a Point of View Based in East Asia——

Hiroshi ISHIBA

Keywords : *Kumibiki Shinwa* (クニビキシンワ)

一

『出雲国風土記』意宇郡の条に見える国引き神話は、最も著名なものの一つである。出雲国土生成神らしい八束水臣津野命が初めて作った国が小さかったので、三本の綱を縫り合わせた丈夫な綱で国引きし縫合したとする。

「志羅紀乃三埼」を綱を手繰りく、そろくくと「国々来々」と引いて来て縫った国は、島根半島西部出雲大社の後ろ日御碕・旅伏山^{たふしやま}一带を含む地塊とされる。杭は三瓶山(一、二六メートル)、綱は蘭の長浜(南北約八キロメートル)である。

次に、「北門佐伎之国」を引いて島根半島中央部の佐太の地塊とし、「北

門農波乃国^(良)」を引いて島根半島南部松江市北部の地塊とし、「高志之都都乃三埼」を引いて島根半島東部美保関の地塊とした。この時の杭が大山(一、七二九メートル)、綱が弓ヶ浜(十七キロメートル)である。すなわち、『風土記』にいう国引きとは、島根半島の地を加えたことをいうのである。

「志羅紀」は新羅、朝鮮半島の地をさし、「高志」は北陸の地とされているが、「北門佐伎之国」と「北門農波乃国」はよく分らないが、共に隠岐島とする説もある。それはともかく、右の国引き神話に対する私の興味と関心の中心は、不動のはずの大地がロープで引かれて来た点にある。つまり、国引きが成り立つためには、大地は不動のものではなく、動くものであるという前提がなくてはならないであろう。われわれ現代人には、山

というと「山のごとく動かない」ものだという固定観念があるが、古代人の考える山や大地は、むしろ、動くものであったと見るべきであろう。更に言えば、山や大地が動くものであるというだけでなく、それは海の上に浮かんでいなくてはならないであろう。すなわち、根っ子がなく浮き草のように漂っているのである。それゆえに、ロープで引き寄せることが可能なのである。この漂流する大地を固定するには、国引きとはまた別の作業が必要である。

二

『古事記』によれば、「天地初発之時」「国稚如二浮脂一而、久羅下那州多陀用弊流之時」とあって、わが列島が漂流していたことを示している。

また、『日本書紀』本文には、

古天地未^レ剖、陰陽不^レ分、渾沌如二鶏子一、溟滓而含^レ牙。

とあり、

開闢之初、州壤浮漂、譬猶三游魚之浮二水上一也。

という。『書紀』一書(第二)は、「古国稚地稚之時、譬猶二浮膏一而漂蕩」、一書(第五)「天地未^レ生之時、譬猶二海上浮雲無^レ所二根係一」などと記す。要するに日本列島が根無し草のように、海上に浮いて漂流していたということである。

『書紀』本文にいう「鶏子」は宇宙卵のことらしく、ヒンズー教の聖典『ヴィシュヌ・プラーナ』によると、巨大な卵が浮かんでおり、その中にわれわれの生活する大地があるとされるから、結局、この大地は浮かんでいる大地である。

また、『古事記』に、

是に天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「修^三理固^三成是多陀用弊流之^二国^一」と詔りて、天の沼矛を賜ひて、言依さし賜ひき。故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして畫きたまへば、塩^{しほ}許々^{こほろこほろ}袁々^{こほろこほろ}呂々^{こほろこほろ}適^に畫き鳴して引き上げたまふ時、其の矛の末より垂り落つる塩、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能基呂島なり。

とあり、『書紀』本文に、

伊奘諾尊・伊奘冉尊、立^二於天浮橋之上^一、共計曰、底下豈無^レ国歟、廼以^二天之瓊矛^一、指下而探之。是獲^二滄溟^一。其矛鋒滴瀝之潮、凝成^二嶋^一。名之曰^二礪馭慮嶋^一。

『書紀』一書(第一)

二神立^二於天上浮橋^一、投^レ戈求^レ地。因畫^二滄海^一、而引拳之、即戈鋒垂落之潮、結而為^レ嶋。名曰^二礪馭慮嶋^一。

一書(第二)

伊奘諾尊・伊奘冉尊、二神、立^二於天霧之中^一曰、吾欲^レ得^レ国、乃以^二天之瓊矛^一、指垂而探之、得^二礪馭慮嶋^一。

一書(第三)

伊奘諾・伊奘冉、二神、坐^二於高天原^一曰、當有^レ国耶、乃以^二天之瓊矛^一、畫^二成礪馭慮嶋^一。

一書(第四)

伊奘諾・伊奘冉、二神、相謂曰、有^レ物若^二浮膏^一。其中蓋有^レ国乎、乃以^二天之瓊矛^一、探成^二嶋^一。名曰^二礪馭慮嶋^一。

などとあるのは、海上に漂っていた大地とその固定をいうのであろう。右の『古事記』や『書紀』の伝承は、インド神話における「乳海攪拌」の話を想起させる。すなわち、『マハーバータ』には、マンガラ山を軸とし、亀アクパラーを軸受けとし、ヴァースキ龍王を縄として大海を攪拌したとある。

三

古代人の考える山や大地は、どうやら、「動くもの」であったらしい。

『ラーマーヤナ』は『マハーバータ』と並ぶインド二大叙事詩の一つであるが、『ラーマーヤナ』の方が少し古く、紀元前二世紀頃に現在の形をとったと考えられている。この『ラーマーヤナ』の中で活躍する猿面のハヌマーンはインドの民衆に最も愛されている半獣神であるが、ハヌマーンがヒマラヤ山を担いで宙を飛ぶ場面は最大の見せ場で、好んで描かれる(図版1)。すなわち、山は動くのである。



図版1 ヒマラヤ山を運ぶハヌマーン
(『インド神話入門』より)

『列子』湯問第五に、

帝感^二其誠^一、命^二夸蛾氏二子^一負^二三山^一、一厓^二朔東^一、一厓^二雍南^一。

とあって、天帝が愚公の誠意に感じ、太行・王屋の二つの山を背負わせて移したという「愚公、山を移す」の有名なエピソードを記す。また、晋の張華の『博物志』巻二に『尚書緯』の一つ『考靈耀』を引いて次のごとく言う。

考靈耀曰地有四遊冬至地上北而西三万里夏至地下南而東三万里春秋二分其中矣地恒動不止譬如人在舟而坐舟行而人不覺

つまり、大地は四つの動き方をしており、冬至・夏至・春分・秋分それぞれに移動しているが、「地、恒^二動^一キテ止^二マラザル^一」われわれがそれを動いていると思わないのは、船中に坐している人間が船が動いていてもそれを感じないようなものだということである。

『尚書緯』は前漢(前二〇六〜後七)末の書とされるから、中国においても動く大地の思想はずいぶん古いのである。或いは、『幽明録』に晋の永嘉の乱(永嘉五年(三二一))のこととして、彭娥が大山に向かって突進すると山は二つに開いて数丈の幅の道ができ、彭娥を追って群賊が山へ入ると山はぴたりとあわさって元の姿に戻った(「山立開広数丈平路如

砥群賊亦逐娥入山山逐崩合泯然如初賊皆庄死」とある(『太平広記』巻一六一「宜陽女子」・巻三九七「石雞山」)。
『幽明録』の記事は仏教における衆合地獄にあるという動く山と似ている。

すなわち、『往生要集』巻上に次のごとく言う。

衆合地獄者、在黑繩下、縦広同前、多有鉄山、両兩相對、牛頭馬頭等諸獄卒、手執器仗、駈令入山間、是時兩山迫来合押、身軀摧碎、血流滿地、或有鉄山、從空而落、打於罪人、碎如沙揣、

右は、『瑜伽論』巻四(『大正蔵』三〇の二九五下〜二九六上)、『大智度論』巻一六(『大正蔵』二五の一七六上)に基づく。「或ハ鉄山有り、空ヨリ落ツ」と、山が天空より降下すること、例えば、わが「天の香具山」が「天降付 天之芳来山」(『万葉集』巻三二二五七)「天降就 神乃香山」(『万葉集』巻三二二六〇)などと詠まれてよく知られる。

『阿波国風土記』(逸文)「アマノモト山」の条には、

阿波国ノ風土記ノゴトクハ、ソラヨリフリクダリタル山ノオホキナルハ、阿波国ニフルクダリタルヲ、アマノモト山ト云、ソノ山ノクダケテ、大和国ニフリツキタルヲ、アマノカグ山トイフトナン申。

(仙覚『万葉集註釈』巻三所引)
とあり、『伊豫国風土記』(逸文)「天山」の条にも、

伊預国風土記曰 伊与郡 自^二郡家^一以東北 在^二天山^一 所^レ名^二天山^一 一由者 倭在^二天加具山^一 自^レ天々降時 二分而 以^二片端^一一者 天^二降於倭国^一 以^二片端^一一者 天^二降於此土^一 因謂^二天山^一 本也

とあって、山が天空より落下し、二つに割れて鎮座したことを伝えている。この香具山が畝火山をめぐって耳梨山と争ったという著名な伝承(『万葉集』巻一一三・一四)も、山は動くものだという発想が前提にあるであろう。大和の香具山の神聖性は、『記』『紀』は触れていないが、高天原から天降ったという伝承に支えられていたのである。

『百鍊抄』第四、永延二年(九八八)五月十日の条には、

○五月十日。大和国添上郡橘山嶺三町余許。去^二山脚^一四町許坤方移置。草木不動。嶺上有^レ倉。倉中有^二仏像^一。又不^レ動。

とあって、『続古事談』第一(王道 后宮)もこれについて次のごとく記している。

一條院御時大和国ソフノ上ノ郡二栖山ノ峯二三町バカリ未申ニアタリテ。小山ノタカサ八九尺バカリナルニ。オヒタルウヘ木モハタラカズシテウツシヲキタリケリ。其峯ノ上ニ蔵アリケリ。蔵ノ中ニ仏像アリケリ。五ケ日ヲヘテ風フキタフシテケリ。ナニノ故トシラズ。不思議ノ事也。

八、九尺の小山であれば、或いは一夜の中に人為的に動かすことも可能であったかも知れない。

一夜にして島が出現したり、また、消えてしまったという現象は、火山列島においては、古来、しばしば見られることであつたから、山や大地が動くものであるという考えは、案外、受け入れ易かつたであろう。

例えば、『続日本紀』天平神護二年(七六六)六月五日条、同宝龜九年(七七八)十二月十二日条には、大隅国の海中に出現した新島について報告した記事が見えるし、わが山陰地方にも類似の記録がある。すなわち、明応九年(一五〇〇)島根半島西端の日御碕の沖に新島が出現したが数日にして没したという。

『島根縣史』第六卷に、

後土御門院明応九年九月廿三日夜御崎清江の海中なる御経島(又日置島)沖に霊島出現す、人呼んで蓬萊島といへり、男女競ふて此島に渡り其生竹を伐採り又金砂を採取す、数十日にして海中に没入す、此時伐取りし霊竹今尚日御崎神社に蔵す、(六六二頁)

とある。『島根縣史』はこの一件については、諸資料を列挙して詳記しているが、その中の『小野氏系譜』に「浮島出来 俗曰蓬萊也」、日御碕神社所蔵の古記に「蓬萊出現ス」、国守京極経忠の十月十八日の書状に「彼蓬萊當浦へ出現候」、十月十八日付の政経書状に「今度出現之蓬萊霊竹」など「蓬萊」の語が見えるのは注意を要する。なかんずく、十月十日の経忠書状には「當浦^江蓬萊着候」とあるから、或いは、漂着した島であるとする見方も存したのであろう。

ちなみに、日御碕神社の小野宮司家は、皇室と同様万世一系の家柄で、今でも宮司のことを「殿サン」と呼ぶほどである。神社には右の蓬萊霊竹

二本が神宝として保存される。

このような浮島の現象は珍しいことではなく、現に島根県安来市の飯梨川河口の中海^{なかつみ}に出現した浮島「マッド・ランプ現象」は、近年の大きなニュースとなったほどで、拙稿「『懷硯』卷二の二へ付たき物は命に浮桶」と島根県中海に出現したマッド・ランプ¹⁾で詳しく報告している。その中で『懷硯』の他、『堺鑑』・『摂陽奇観』・謡曲「江島」などの浮島についても触れた。

四

ところで、『万葉集』卷二一一三一人麻呂の代表歌の一つとして知られ、「妹が門見む 靡けこの山」という表現は、研究者の間でも鑑賞者の間でもいたく評判がよいのだが、相似た発想はいくらもあるのである。

例えば、卷一三三三四二にも「美濃の山靡け」と見えるし、一八世紀の女流歌人・恩納^{ナベ}なべの琉歌、

恩納^{ウナダキ}嶽^{タケ}あがた里^{サトウ}が生まり島^{ムイノウ} 山も押し除けて^{ヌキテ} くがたなさな

恩納嶽の向うに恋しい人の故郷がある。その邪魔な山を押し除けて、あの人の故郷を私の方に引き寄せたいものだ。

は、人麻呂と同じ発想である。

田桐正彦氏の報告によると、一三世紀中頃の成立と見られる聖職者の手になる説教集(フランス国立図書館所蔵写本)に、

バビロニアニ猶太人有り。君王治下ノ彼ノ地ノ基督教徒迫害ヲ謀リ、君王ニ進言シテ曰ク、耶蘇ガ弟子ヘノ訓戒ニ、「若シ汝ラニ辛子一粒ホドノ信仰有ラバ、山ニ向ヒテ命ゼヨ、『動ケ』ト。必ズヤ動カン」ノ一条有り、ト。

とある由。

これらを、動かないはずの山に動けと命じた感動的表現、言霊の力などとはめたたえるよりも、山を動くものとする古代人の発想の揺曳と見るべきであろう。

或いは、『古今集』卷一七七八八四、業平の著名歌、

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端^は逃げて入れずもあらなむ

は、『古今六帖』巻一―三四四、「かんつけのみわけ」の歌、

おほかたはみねもたひらになりなん山あればぞ月もかくる

や、『後撰集』巻一七―二五〇、上野岑雄の歌、

おしなべて峰もたひらになりなん山のはなくば月も隠れじ

などの類歌が知られているが、『伊勢物語』第八二段、渚の院で惟喬親王に代わって紀有常が詠んだ歌、

おしなべて峰もたひらになりなん山は端なくは月も入らじを

で知られる。『伊勢物語』には他に、

山のみな移りて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

(第七七段、業平歌)

もある。これらもまた、山は動くものだとする考えが根底にあると見るのがよいであろう。祭りのハレの日に登場して動く山鉾や山車に「山」の文字が見えるのは、「動く山」の発想が前提になければならないであろう。

五

わが鳥取県西伯郡大山町と淀江町との境をなす孝霊山(七五一メートル)は、地元ではカラヤマと呼ばれ、海に向うのカラから運んで来た山だと伝える。これに関して、一九九五年二月二十六日付で全国紙三紙に全面使って鳥取県が出した広告は、「山が海を渡った、日本海交流のお話」と題して大山に向けて、船の上に孝霊山が乗せられて運ばれて来るイラストを掲載し話題を呼んだのは記憶に新しい(図版2)。

このイラストでは、孝霊山は船に乗せられて運ばれて来るが、おそらく孝霊山は海上を漂っていた浮き島であったのに違いない。漂流していた大地や島が固定されるというタイプの伝承は、各地に存するのである。

金沢篤氏の報告によれば、それらは「流れ島型の創世神話」で、日本列島の西部、中国の東海岸から朝鮮半島の一部、インドネシアから南太平洋のポリネシアの殆ど全域にわたって分布するとい³⁾う。

北陸能登半島にも同様の伝承がある。『石川県鹿島郡誌』上巻には、

○蛸島。大津(金ヶ崎)の蛸島は今地名として田の中に残れるが元は島にして御桜及塩津の唐島と共に正月元朝何方よりか流れ来りしも

のなるが、庄次平といふ者藁を打ちぬたるに其の音のために此等の島々は其の儘其所に止りたるものなりといふ。(九五三―九五四頁)

とあり、「蛸島社」の条では、これは口碑によるとして、

當社はもと小宇黒語蛸島に鎮座せる無格社にして市杵島姫命を祭る

當社は天津冷泉の池にして現在田野中に在れども元は島なりしと云。口碑に拠れば上古當地の御桜及び塩津の唐島と共に流れ来り。時に當時の庄次平と稱する者藁を打ちたるに其の音の発すると同時に之等(五七五頁)

と記している。蛸島・御桜・唐島の三島は、もとは漂流していたのである。

『源氏物語』若菜上に、明石入道が見た有名な夢の記事がある。

わがおもと(明石の君)生まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下に蔭に隠れて、その光にあたらす、山をば広き海に浮べおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく、となん見はべりし。

右に言う須弥山は梵語Sumeruの音訳。世界の中心にある巨大な宇宙山である。須弥山は持ち上げられるだけでなく、海に浮かんで漂っているのである。



図版2 船で運ばれる孝霊山
(朝日新聞1995年2月26日付)

六

八世紀盛唐の詩人である杜甫晩年の詩に、「登岳陽樓」と題する有名な五律がある。その頷聯、

吳楚東南坼 吳楚 東南二坼^キケ

乾坤日夜浮 乾坤 日夜二浮カブ

とある「乾坤日夜浮」は、天地が日夜、洞庭湖中に浮動するの意。

『晉書』天文志上に記す葛洪の言に、

黃帝書曰、天地地外、水在天外、水浮天而載地者也、

と見える。天も地も水の上に浮かんでいるというのである。天地が水の上に浮かんでいるというのは、ひとり『黃帝書』にそうあるだけでなく、大陸の人々が有していた宇宙観であり、それは「渾天説」として知られる。

「渾天説」は「蓋天説」と共に古代中国の代表的宇宙構造説とされる。その大体については、『晉書』天文志や『隋書』天文志によって窺うことができる。すなわち、『隋書』天文志に言う、

前儒旧説、天地之體、狀如鳥卵、天包地外、猶殼之裏黃、周旋無端、其形渾渾然、故曰渾天、又曰、天表裏有水、兩儀轉運、各乘氣而浮、載水而行、

右の「前儒旧説」は、二世紀、後漢の張衡の『渾天儀』（『渾儀注』）のことであるが、それによれば、鶏卵を比喻として、地を卵黄、天はその外にあって地を包む殻、しかして、その両者は水の上に浮かんでいるとする。

九世紀、晩唐の詩人羅隱の「春中湘中、題岳麓寺僧舍」七律の頸聯、

春融只待乾坤醉 春 融ケテ只ダ待ツ 乾坤ノ醉ヘルヲ

水闊深知世界浮 水 闊クシテ深ク知ル 世界ノ浮カブヲ

や、北宋・蘇軾の「濠州七絶」中の「浮山洞」詩、

人言洞府是鼇宮 人ハ言フ 洞府ハ是レ鼇宮

升降随波与海通 升降 波ニ随ヒ 海ト通ズト

共坐船中那得見 共ニ船中ニ坐シ 那ゾ見ルコトヲ得ン

乾坤浮水水浮空 乾坤ハ水ニ浮カビ 水ハ空ニ浮カブ

の結句などによって見ても、大地は浮かんで漂っているものであるという考え方は、現代人の考えるほど奇抜なものではなかったのである。

七

ニュージーランドの伝承によれば、南太平洋ポリネシアのある島に住んでいた三兄弟の末っ子マウイの釣り針にかかった大きな島がはげしく動くので、ロープでしばりつけて固定させたが、この島がニュージーランドの北島で、マウイはこの島の王となったという。⁽⁴⁾

また、台湾の神話でも、海の中から島を釣り上げ、最初の島ができたといひ、或いは、大亀の背に国土が乗っていて、その亀が海上に浮き上って最初の国土ができたという。⁽⁵⁾

『三国遺事』卷一、延鳥郎・細鳥女伝承も類話としてよいであろう。延鳥郎と細鳥女は新羅の漁師夫婦。延鳥郎が浜辺で海草を採っていたら大きな岩が現れ、延鳥郎を乗せて日本へ連れ去った。日本の人々は彼を見て、「これは尋常の人ではない」と驚き、王とした。後を追って来た妻も王妃となった。

第八阿達羅王即位四年丁酉。東海浜有延鳥郎細鳥女。夫婦而居。一日延鳥婦海採藻。忽有一巖。負婦日本。国人見之曰。此非常人也。乃立為王。細鳥佐夫不来帰尋之。見夫脱鞋。亦上其巖。巖亦負婦如前。其国人驚訝。奏献於王。夫婦相会。立為貴妃。

鳥取県の唐山（孝霊山）、石川県の唐島、右の巨岩など、山や島、岩が日本海の彼方に浮いて移動したことを伝えるものであろう。

亀と大地については後に述べるが、伊豆半島に点々と分布している巨大な蟹の伝承は、大きな岩だと思ったら、巨大な蟹の甲羅だったというもので、これなども動かないはずの岩は、実は動くものであるという考えが前提にあるのであろう。

八

山口市の中心部に浮かぶ小高い丘、亀山について「うごく城」の伝承がある。

むかし、むかし、いつのころのことでしたか、今の山口のあたり一帯をおさめていた領主に、一人の美しい姫君がいましたそうです。

この姫も年ごろになって、いつか恋いしたう人ができました。その

人は、それこそ姫にふさわしいりりしい若侍でした。けれども、その若侍の名前も住んでいるところも、姫は知りませんでした。というのは、この若侍は、いつも人しれず館にしのびいり、ひとときのかたらいを楽しむだけで、しばらくすると、まだどこともなくかえって行くからでした。

ある日、姫は、どうにかして若侍の身元を知りたいものと思い、乳母にこのことを打ちあけて相談しました。聞いて乳母は驚きましたが、「こんどこられたときには、長い糸のついた針を、その人の着物のすそにそっとつけておいてみなされ」とおしえてくれました。

その夜のこ、姫は乳母の言葉どおりに、長い糸のついた針を、若侍のすそにそっとつけておきました。

あくる朝、その糸をたどってゆきますと、中の島の池にまでつづいておりました。これを見て姫は、

「あのやさしいお方が、この池の主とは。わたしは妖怪にみこまれてしまったのか」と身も世もなくなげき悲しみました。

ところで、その夜、領主の夢枕にその若侍があらわれて、

「わたしは池の主の大亀です。夜な夜な若侍の姿となって、あなたの姫のもとをおとずれることを楽しみにしておりました。けれども、正体をきづかれた今となっては、化性の身のなんとすることもできません。せめていままでのつぐないなりともいたしたいと思います。つきましては池の中の小島に城を築いて下され、きっと難攻不落の城となりましょう」とつづいて、姿を消しました。

不思議に思った領主が姫にたしますと、夢枕の若侍の言葉のわけもわかりました。

そこで小島に立派な城を築きました。

ある年、敵が攻めてきました。と、小島の城は、まるで魔法のお城のように、敵が攻めてくるたびに、前後左右に小島ごと動くのです。敵はどうしても攻めおとすことができず、とうとう引きあげて行きま

した。それもそのはずでした。城の下では池の主の大亀が、足を動かしたり頭をもたげたりして、自由自在に、敵から城をまもっていたのです。

ところが、ある年のこと、城の中に井戸をほることになりました。工事はすすんで、水がでそうなところまでほりあげたのですが、水はでてこなくて、おびたしい血が、七日七晩ふきだしつづけました。それからもう、城は動かなくなった、ということでした。

その城というのが、いまの亀山にあったと伝えられる城なのだそうです。話者 河村豊・河野通毅・河邑光城

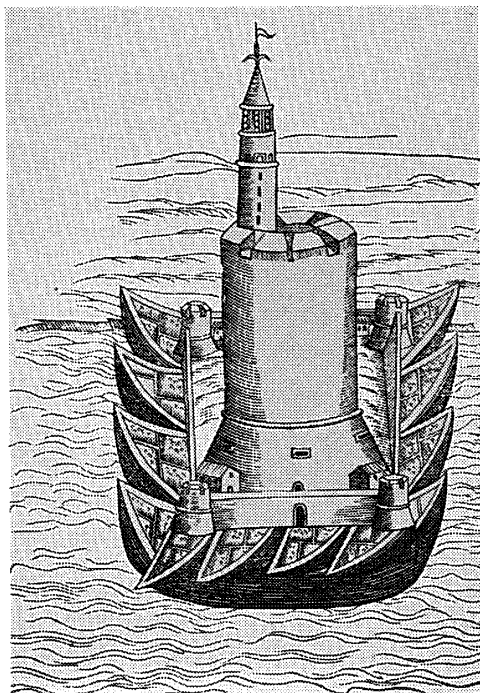
（『日本の民話』29、一九六〇年、未来社）

右は幾つかの説話のタイプが接合されており、比較的新しい伝承と思われるが、島が動くこと、大亀がその島を背負っていることなど、注目すべきところである。

大亀が背負った城のことは、晋の干宝撰『搜神記』巻十三に見える。

秦惠王二十七年、使張儀築成都城、屢頹。忽有大亀浮於江、至東子城東南隅而斃。儀以問巫。巫曰「依亀築之。」便就、故名亀化城。

或いは、武帝の浮城と関わりがあらうか。漢の武帝（在位、前一四一～前八七）は外敵に備えて、四角い筏の上に城を建てたが、この水に浮く城



図版3 水に浮かぶ城
（『驚異の工匠たち』より）

には二千人以上の軍隊を駐屯させることができたという。ジロラモ・マギの『都市の築城』（一五六三年）に似た図がある（図版3）。

余談だが、井上ひさし氏原作の人気劇「ひょっこりひょうたん島」は、一九六四年四月から一九六九年三月まで、五年にわたってNHKテレビで放映された人形劇ミュージカルであるが、この島は瓢箪の形をした浮いている島で、動くのである。島には大統領もいて一つの世界を形成している。井上氏が何をヒントにして「ひょっこりひょうたん島」を創作したのか知らないが、そのヒントになるものは、われわれの周りに満ちていたのである。

九

『史記』卷六、秦始皇帝本紀（『漢書』郊祀志にも見える）によれば、始皇帝二十八年（前二一九年）のこととして、次のように記す。

齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛州、僊人居之。請得齋戒、与童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。

「徐市」（『史記』淮南衡列伝では「徐福」に作る）は「徐福」として知られるが、この三神山は三壺山とも呼ばれ、蓬壺、方壺、瀛壺とも呼ばれたのである。すなわち、晋の王嘉の『拾遺記』卷一（高辛）に、

三壺則海中三山也。一曰方壺則方丈也。二曰蓬壺則蓬萊也。三曰瀛壺則瀛州也。形如壺器此三山上広中狭下方。

とある。三神山は壺の形をしているので三壺山とも呼ぶのはよいとして、この三山の壺形というのは「上広中狭下方」だというのである。何とも奇怪な山ではないか。

壺形の中に一つの世界があるとするのは、壺公と費長房の話で周知の壺中の天地（『神仙伝』巻五）を想起するが、壺とは壺蘆のことであり、葫蘆に同じ。葫蘆はすなわち瓢箪のことである。

『列子』湯問第五によれば、

渤海之東、不_レ知_二幾億万里_一、（中略）其中有_二五山_一焉。一曰、岱輿。二曰、員嶠。三曰、方壺。四曰、瀛州。五曰、蓬萊。（中略）而五山之根、無_レ所_二連著_一、常隨_二潮波_一、上下往還、不_レ得_二暫時_一焉。仙聖毒_レ之、訴_二之於帝_一。帝恐_下流於四極_一、失_中群聖之居_上、

乃命_二禺疆_一、使_下巨鼈十五、舉_レ首而戴_レ之、迭為_二三番_一、六万歳一交_上焉。五山始峙而不_レ動。

とあって、五山の根っ子はなく、浮草のように波のまにまに上がった下がったりして漂流し、しばらくも止まっていられなかったのである。そこで天帝は、五山が宇宙の四方の果てにと流れて行かないように大亀の頭に戴せたのである。

それでもって、「五山始峙而不動」というが、海中で亀が支えているからには、やはり「山は動く」であろう。その証拠に、後に、五山のうちの岱輿と員嶠は北の果てへと流れて行き、大海原に沈んでしまったという（於是岱輿・員嶠二山・流_二於北極_一、沈_二於大海_一）。結局、五山は方壺・瀛州・蓬萊の三神山（三壺山）となったわけである。

『玄中記』は、

東南之大者、有巨鼈、以背負蓬萊山。

と、はっきり大亀が山を背負っていると述べている。

『楚辞』天問に、

鼈戴_レ山抃 鼈、山ヲ戴キテ抃ス、

何以安_レ之 何ヲ以テカ之ヲ安ンズル。

積_レ舟陵行 舟ヲ積テテ陵ヲ行キ、

何以遷_レ之 何ヲ以テカ之ヲ遷セル。

とある「鼈戴_レ山抃、何以安_レ之」について王逸は『列仙伝』を引いて、

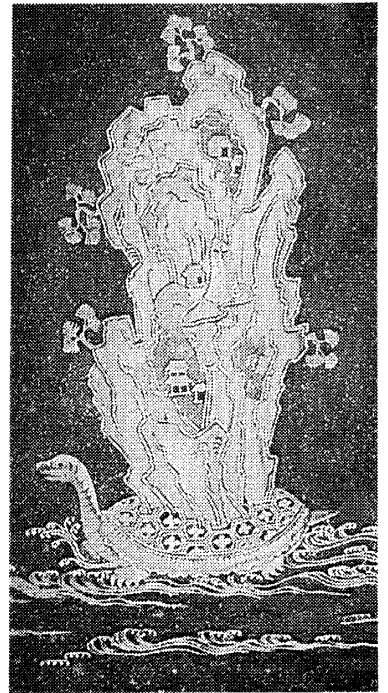
列仙伝曰有巨靈之鼈背負蓬萊之山而抃舞戲滄海之中独何以安之乎

（『楚辞章句』）

と言っているから、大亀が蓬萊山を背負っているのである（図版4）。『楚辞』の戴の字は載に作る本もある。「積舟陵行 何以遷之」というのは、海に漂っていた蓬萊山が陸上に移ったとする伝承があったのであろう。

既に述べたように、『マハーバーラタ』に見える乳海攪拌の神話で、霊山を海中の亀の背に乗せて回転し、不死の薬を作ったという伝承は、伊藤清司氏によると、

この系統の神話は蒙古のカルミク族など中央アジアにもあり、また南海を経由して東アジアにも伝播したのではないかと考えられるが、さきにもふれたように、亀に支えられる蓬萊山に仙人が住み、そこに



図版4 東京国立博物館蔵『蓬萊山蒔絵』(平安時代)
(『アジアの宇宙観』より)

不老不死の薬が存在するという説話も、『マハーバラタ』の乳海攪拌の伝承とまったく無縁ではないと思われる⁽⁶⁾。

という。また、インドネシアやアフリカの俗信では、大地が牛の角に乗っているとし、ロシアのクリミア地方にも同系の伝承がある由である⁽⁷⁾。

インドネシアのバリ島はプタワン・ナラと呼ばれる巨大な亀の背に乗っているとき、その亀の体を雌雄二匹の龍が吉祥紋を結び、しっかりとしばりあげ、大地を不動のものにしたという⁽⁸⁾。

日本列島において、寺院の床下に見られるふくらみのある土盛の基壇＝亀腹は、亀の背に寺院の建物が乗っている姿を示している。

十

上来、述べて来たように、山や大地は不動のものであるどころか、むしろ動くものであり、それは浮いているものであるとする考え方は、インドをはじめ広くアジア全域に見られるものであった。おそらく『出雲国風土記』に見える国引き神話は、このようなアジア全域に広く見られる考え方の一つの表現であろう。それでは、国引き神話の中に、浮いて漂流する大地を引いて来たとする所伝はないのであろうか。実は、あるのである。

東京国立博物館が所蔵する『大山寺縁起絵巻』は室町時代の書写かとされ、史料編纂所にも影写本がある。『絵巻』は元国宝、原本は昭和三年に焼失し、博物館本は摸本である。

この摸本絵巻の一場面に、日本海側から見た島根半島と弓ヶ浜、大山の図があるが、その右上隅の色紙形に、

漢城之東岸碎震而任風

来流といへるハ今の浮浪山也

山王権現の勅を奉て彼山

をかきとめ給ける御弓の

影湖水にうつりてをのつから

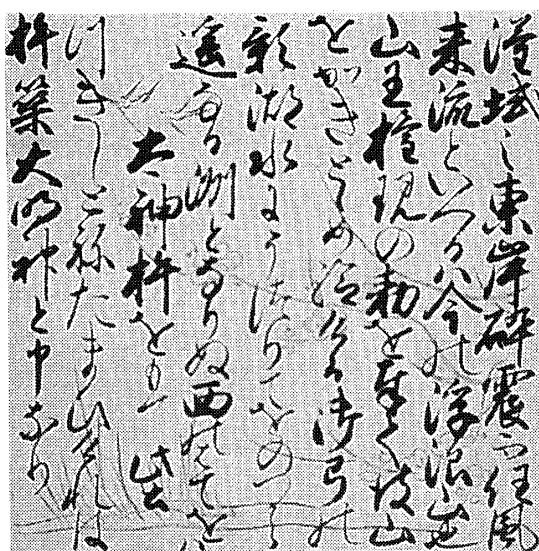
遙なる州となりぬ西のはてをハ

太神杵をもて此土

つきしとねたまひければ

杵築大明神と申なり

とある(図版5)。

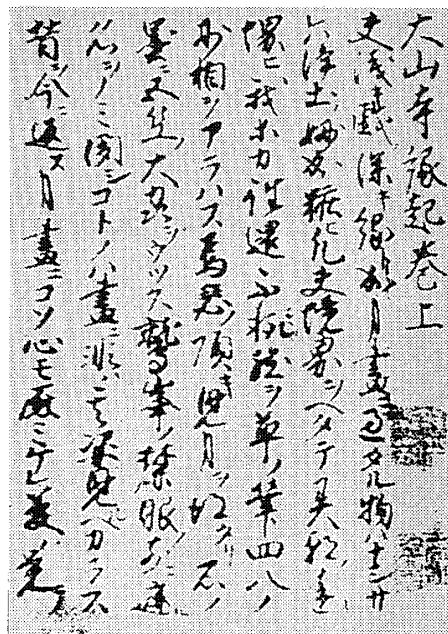


図版5 東京国立博物館蔵『大山寺縁起絵巻』の中の色紙形詞書
(『古代出雲文化展図録』より)

これによれば、大陸の東岸が碎震して、風のまにまに流れて来た浮浪山を、山王権現が勅によって弓をもってかきとめたとしたのであり、弓の影が弓ヶ浜となり、島根半島を杵でもってついて固定せしめたということであろう。

右の伝承には異伝がある。すなわち、鳥取県大山洞明院所蔵写本『大山寺縁起』がそれである。洞明院本は題簽に「大山寺縁起之巻」とあり、幕

末頃の書写とされるが、中世の筆影を残している（図版6）。



図版6 大山洞明院蔵『大山寺縁起』
（佐々木一雄編『大山寺縁起』より）

今、『大山寺縁起』（昭和四十六年、稲葉書房）によって記す。

いっほどの事やらん、西海の波にうかべる山有り。縁起の文には漢城之東岸、^{くつれはる}地震而任^せ風来り流るとあるとかや。彼の山の事なり。地藏権現、山王に勅して此の山をつなぎとどむべき由ありければ、山王御弓のはずにてかきよせ給ひけり。弓の影湖水にうつりて、化しておのづからはるかなる州と成りて、浪にうかべる彼の山を留め給ひぬ。今弓山の浜と申すは、彼の山をつなぎ留めたる州浜なり。件の山長く遠き間、出雲八重垣猶は^{ただ}濊^たひけるを、^{人皇}孝安天皇三十二年庚申の歳、八雲の太神あまくだり給ひて、土をつかね^{かね}杵をくだして、此の地に彼の山をつきしとね給ひければ、やがて此の土に^{もと}基^{もと}してげり。それより彼の太神を杵築大明神とぞ申しける。件の山を浮浪山と申すは此の故なり。西に鰐淵寺、金剛蔵王の霊地なり。東に枕木山、医王善逝の霊場あり。即ち胎金兩部の峰にて、靈驗今に新たなり。彼れ此れの深き故有る事共なり。

右の所伝は、『縁起絵巻』の詞書を引用しながら、かき寄せたところの弓が弓ヶ浜になったとして、また、別の伝承を記しているが、つなぎ留めた山とは島根半島を指すことは明らかであり、それは浪に浮かび、漂流する山塊であったのである。

弓ヶ浜半島は現在海拔一〇メートル以下、幅二、四キロメートル、長さ一七キロメートル程の砂州であるが、『風土記』に「夜見嶋」と記すように、もとは島であったものが、『縁起』の頃には陸続きの半島となっていたのである。

大山洞明院本が書写せられたのは幕末の頃とされ、あまり信用されていないようであるが、『縁起』の所伝は、流れ漂っていて不安定であった大地や島が、英雄、神によって固定せられたとする「流れ島型の創世神話」と完全に一致する。

「流れ島型の創世神話」は日本列島以外にも、中国の東海岸から朝鮮半島の一部、インドネシアから南太平洋のポリネシアの殆ど全域にわたって分布しているといわれるが、わが国引き神話もその中の一つと見てよいであろう。

水野祐氏が名著『出雲風土記論攷』の中で、「ただ新羅国の東方の日本海面に漂っていた陸塊を言ったものと解すればよいのではなからうか。」（八一八頁）、「ただ出雲の北岸、日本海の正北の海上に漂うていた陸塊と解釈するだけでよいのではなからうか。」（八一九頁）と述べたのは正しいであろう。「北門佐伎之國」や「北門農波乃國」を隠岐島とする説が正しいければ、隠岐島も浮島であったのである。海上に浮いていた大地であったがゆえに、ロープで引いて来ることができたのである。

『大山寺縁起』によれば、動く大地を杵でもってついで固定したと読める。『縁起』の杵築大明神と杵との関係を、『風土記』の八東水臣津野命と「加志」（杭）の關係に置きかえて考えると、「佐比売山」（三瓶山）や「火神岳」（大山）は、ロープを引きかけた杭ではなくて、杭でもってついで、動く大地を固定したものと見るべきであろう。

『風土記』には、「堅立加志者 石見国与二出雲国一之界有 名佐比売山是也 亦持引綱者 藺之長浜是也」、「持引綱夜見嶋 堅立加志者 有二伯耆国一火神岳是也」とあって、ロープをかけた杭だとは記していない。

従って、『風土記』の国引き神話は、流れ漂っていた大地や島が、英雄や神によって固定されるとする「流れ島型の創世神話」の一つであることは明らかであろう。

以上の考察によって、明らかなように、洞明院本『大山寺縁起』は、書

写は新しくても、むしろ、国引き神話の古態を今に保存する貴重な所伝であるということができよう。

十一

洞明院本『大山寺縁起』に見える「鰐淵寺」は、全国でもトップクラスの古文書と文化財を所有する古刹で、島根半島西方の山中深くに現存する。一般には弁慶伝説で知られるが、その鰐淵寺は「浮浪山鰐淵寺」と称するのである。

『出雲国浮浪山鰐淵寺略縁起』には、

此山ハ天竺靈鷲山ノ良地欠ケテ浪ニ浮ムテ流れ来レルナリ

とあり、「是二由テ山ヲ浮浪ト名ケ玉フ」と、『大山寺縁起』とはまた別の伝承を伝えている。

年月日未詳の鰐淵寺僧某書狀断簡(二八六号文書)には、

當寺者、最初、西天鷲嶺之良隅欠而、浮浪流来於素盞島尊築留玉フ、

故二曰浮浪山矣、

とあって、インドの靈鷲山の一部が欠けて、浮浪し流れ来たのをスサノヲが(引き寄せて)固定したというので、短いけれども完全な「流れ島型の創世神話」と認められる。

井上寛司氏が、

「浮浪山」というのは鰐淵寺が立地する場所そのものの呼称であって、具体的には島根半島全体を指しており、鰐淵寺だけの固有の山号ではなかった。このことは、例えば島根半島の東寄り(秋鹿郡)に位置する佐陀神社の所在地が中世には「不老山」と呼ばれ(詞林采)、また同じく島根半島の西端、大社坂宮の長谷寺、遙勘の莊嚴寺・靈山寺、修理免の神光寺など多数の密教系寺院が等しく「不老山」を共通の山号としていたことからもうかがうことができる。

と述べているように、「不老山」は「浮浪山」と考えてよいから、結局、「浮浪山」すなわち島根半島であり、スサノヲが島根半島を国引きして固定したとする国引き神話の異伝が存したことになる。

ちなみに、鰐淵寺の山号「浮浪山」を「不老山」と記す永正九年

(一五一二)二月七日、井上坊円秀議状(二三五号文書)もある。
謠曲「御崎」に、

一年天竺月支国、良のすみ欽け落ち、海上にうかみ風波に従ひ、豊葦原出雲国に流れしより、不老山となる。それをいかにと申すに、大日の印字を便りとして、開け初まれる神国なり。しかれば此の山流れよるとなり。浪にうかぶ山つきとめて住む神の、宮作りありしなり。

とあって、ここでも浮浪山を不老山とし、スサノヲが国引きして固定したと述べている。

室町中期の作とされる『雲州樋河上天淵記』は、スサノヲの大蛇退治の故事について記した書で、一種の郷土史ともいうべきもの。この地方の好事家の述作であろうが、この中に、

素戔嗚繩ノ杵繫二浮レ浪山十八里一。島根郡十八里山是也。此杵有深秘。以定二宮居於杵築浜一里也。素戔嗚尊乃大社杵築大明神是也。

と同様に記す。島根半島は現在東西約六十五キロメートルであるから、「十八里」「十八里山」とは島根半島を指して言うのであろう。

十二

中国、桂林の東方、南嶺の支脈の一つに羅浮山脈がある。その南端、広州から東へ七十キロほどのところにある羅浮山(二、二八二メートル)は、旧名蓬萊山と呼ばれた。すなわち、『太平御覧』巻四一「羅浮山」の条に、

南越志曰此山本名蓬萊山
と見える。『南越志』は五世紀劉宋の時代の書であるが、今、佚。『太平御覧』は更に『羅浮山記』を引いて、次のごとく述べる。

羅浮山記曰羅羅山也浮浮山也二山合體謂之羅浮在層城博羅二縣之境有羅水南流注于海旧說羅浮高三千丈長八百里有七十二石室七十二長溪神湖神禽玉樹朱草相伝云浮山從会稽来今浮山上猶有東方草木

これによれば、羅浮山は羅山と浮山が合体したもので、浮山とは文字通り浮いていた島であり、浙江省の会稽から漂流しながら南下し、羅山とくっついたのである。浮山のてっぺんには今でも東方の草木(仙草仙木である)が生えているという。

浮山すなわち浮浪山であることは言うまでもない。このような浮山（浮浪山）があちこちの海上にプカプカ漂っているというのが古代人の認識であったのである。

唐の李德裕（七八七～八四九）は詔勅類の起草を司る高官（中書舍人）であったが、派閥争いにまきこまれて、海南島の崖州（今の三亜付近）に謫せられ、その地で没した。彼は海南島に赴く途中、羅浮山において五律を詠んだ。

羅浮山 番禺連
帥所遺

龍伯釣鼈時

蓬萊一峰坼 裴淵廣州記羅浮山
是蓬萊辺山浮来

飛来碧海畔

遂與三山隔

其下多長溪 茅君内伝山下
有七十二長溪

潺湲淙乱石

知君分一作如此

贈逾荆山壁 （『全唐詩』）

羅浮山については、「蓬萊ノ一峰坼^さケ、飛ビテ碧海ノ畔^{ほとり}ニ来タル」とあるように、蓬萊山の一峰が坼けて飛来したとする異伝も存したのである。

林驚峰の長子・林梅洞（一六四三～一六六六）の七絶「夢梅」詩に、

一樹梅花夢一場

浮山縮^レ地在^二幽牀^一

覺来不^レ識在^二何処^一

猶有三^レ絳衾帶^二暗香^一

とある「浮山」は羅浮山、晋の郭璞が仙術を得た地で梅の名所。梅洞の祖父・林羅山の号の由来するところであった。「縮地」は地脈を縮めて遠方の土地を近くに引き寄せる仙術で、費長房が壺公から学んだとされる。すなわち、『芸文類聚』巻七二「鮓」の条（『太平御覧』巻八六二にも）に、

列異伝曰、費長房又能縮地脈、坐客在家、至市買鮓、一日之間、人見之千里外者数處、

とある。

大地や島は不動のものではない。それは動くものであり、海面に浮かん

でプカプカ漂っているのである。それを引き寄せる「縮地」という術もあったから、『出雲国風土記』にいうような国引きは可能であったのであるがはっきりと記していないのは、わざわざ記す必要もないほど分かったことであつたからであろう。『風土記』は明記しなかったが、山陰地方における国引き神話の異伝は、流れ漂っていてきわめて不安定であつた原初の大地や島が、神や英雄によって国引きされ、固定せられて、そのために人々はそこに安住するようになったとする「流れ島型の国引き神話」をはっきりと伝承しており、その異伝の方こそ、国引き神話の古態を伝えていたのである。

注

- (1) 拙稿「『懷硯』巻二の二へ付たき物は命に浮桶」と島根県中海に出現したマッド・ランプ」（『島根国語国文』第二号、一九九一年十二月）。
- (2) 田桐正彦氏「フランスの中世説話」（『解釈と鑑賞』第四九巻第十二号、一九八四年九月）。
- (3) 金沢篤氏「ハアジアの宇宙観」用語集」（『アジアの宇宙観』三九六頁）。
- (4) 藤井旭氏「チロの星空カレンダー」、夏、8月の星、天の川の誕生」（一九九三年、ポプラ社）三三～三五頁。
- (5) 中西進氏「日本の神話伝説と中国」（『漢字文化を考える』一〇八頁）。
- (6) 伊藤清司氏「亀蛇と宇宙構造」（『アジアの宇宙観』三三五頁）。
- (7) 同右、三四二頁。
- (8) 同右、三四四～三四五頁。
- (9) 鰐淵寺文書二八六号（曾根研三編『鰐淵寺文書の研究』所収。曾根氏は元亀（一五七〇～一五三三）頃かとしている）。
- (10) 『出雲国浮浪山鰐淵寺』（一九九七年、鰐淵寺）二四頁。
- (11) 鰐淵寺文書一三五号（曾根研三編『鰐淵寺文書の研究』所収）に、「雲州不老山鰐淵寺……」とある。

（平成九年十月十五日受理）